

—特集— 閲覧室の現状と問題点（その6）

文学部閲覧室

文学部は明治39年に開設された文科大学の後身であり、まず哲学科が開講された。翌40年9月史学科さらにその翌41年9月には文学科が開講され、45年5月までに現在の研究体制が整った。現在、文学部には哲学科閲覧室・文学科閲覧室・史学科閲覧室（以下哲閲・文閲・史閲と略す）の3カ所の閲覧室に分かれている。哲閲と文閲は本館2階（昭和11年完成）に、史閲は東館2階（昭和39年・40年度に完成）の位置にある。史閲は東館が完成するまで、文学部附属施設の陳列館にあったもので史学科研究室とともに移転したものである。各閲覧室とも、それぞれの学科に所属する図書を収蔵し、併せて約53万冊（47度末）の図書を保有して、現在教官80名、院生415名、学部学生（研修員を含む）668名、事務系職員63名を対象に活動を行なっている。

各閲覧室の座席数は哲閲32席、文閲32席、史閲24席の合計88席となっている。教官・学生を併せた1,153名に対する席数比は7.6%と低いが、教官・院生は研究室で個人席が保障されているとみて、学部学生だけの席数比は13%程度となるから、今までにレポートした他の学部図書室にくらべて低い。

閲覧室には、参考図書も配架され、隣合せの書庫は部内者に開放されるなどの配慮がなされているが、面積も狭いため、哲閲を除いては、閲覧室と閲覧事務室（2名ずつ配置）とは同居している。それに南向きの閲覧室はなく、日当りは不十分である。また、哲閲と文閲にはスチームとコールヒーターが設備されているので暖かい方であるが、冷房設備はないので、夏は暑く、まだまだ快適な閲覧室とはほど遠い感じがする。史閲も同様でスチームがなく、ガスストーブだけなので底冷えがひどい。

哲閲・文閲は同じ建物の同じ階層にあるが、史閲は別棟にある。図書館員にとってこのような配置は管理上、大変であろう。学科別配置は、文学部だけでなく、理学部、工学部などの自然科学系の部局では珍しくないが、学部図書室が3学科に分かれている閲覧室および書庫を管理しなければならないところは、学内では文学部以外には見当たらない。また、文学部は38講座（48年度）で構成されているが、同一系統の講座などは集って「教室」と呼ばれて28教室となり、それぞれの教室が独自の図書分類表をもっている。そのため各閲覧室の書庫には、所属する教室の図書が教室別に、いいかえればそれぞれの分類別に配架されていることになり、利用者（とくに学生）も図書館員も大変なことであろう。（これを解消するため、文学部の統一分類表にNDCを採用して昭和26年ごろから分類目録を編成している。）そのうえ、哲閲・文閲の書庫はすでに一杯で、さらに雨もりがするなど、閲覧室の整備とともに大きな悩みである。この特集の始めにとり上げた教養部図書室の雨もりは、本年5月に「教養部図書館」が新築され面目を一新したため、学内の図書室のなかで最も多くの問題をかかえたところといえるかもしれない。

文学部が建て替えられるのがいつの日かわからないが、閲覧室を中心に、利用者はもちろん、図書館員の管理の面からも、利用しやすい図書館が計画されることを期待したい。

（文責・武内）